

不登校問題

札幌市教育委員会は、病気や経済的理由を除き、年間30日以上欠席した「不登校」の児童生徒数が、昨年度（H22年度）過去最多の1692人だったことを明らかにしました。

その内訳は、小学生は298人（対前年度8%増）、中学生は1394人（対前年度1.2%増）となっています。

一方、北海道全体については、道教委の調査によると、小学生が742人（対前年度2.8%減）、中学生が3379人（対前年度1.2%減）と前年度より減少していますので、札幌市内における不登校児童生徒の増加が目立つ結果となっています。

また、実数は減ったとはいえ、北海道全体では依然として4千人を超える児童生徒が不登校になっていることを、見過ごしてはなりません。

特に、不登校児童生徒の現状を児童生徒の対在籍比で見ると、小学生については平成17年度0.23%であったものが平成22年度は0.27%に、同じく中学生については平成17年度2.04%であったものが平成22年度は2.37%と、それぞれ増加しており、不登校の問題は解決に向かうどころか、むしろ深刻になっていると受け止めるべきです。

自分の子どもの頃のことを話しても仕方ありませんが、昔は、子どもは学校に行き勉強するのが当たり前で、そのことに大人も子どもも疑問を感じていなかったように思います。とはいえ、学校には嫌々行っていたわけではありません。友達にも会えたり、学校が楽しい場所だったことはいうまでもありません。

今でも、学校は、子ども達にとって楽しい所であるはずですが、にもかかわらずどうして不登校になるのでしょうか。道教委の調査によると、不登校になったきっかけは、小学生の場合、不安など情緒的混乱、無気力、親子関係を巡る問題、家庭の生活環境の急激な変化、いじめを除く友人関係などが主な原因と

なっています。また、中学生の場合は、不安など情緒的混乱、無気力、いじめを除く友人関係、病気による欠席、あそび・非行、学業不振が主な原因となっていますが、勿論、不登校になったきっかけを聞けば、100人いれば100とおりのケースがあるに違いありません。

子どもが不登校になった場合には、学校として実態をしっかりと把握すると共に、保護者や関係機関と十分連携しながら、問題の早期解決を図ることは当然のことですが、不登校になってしまってからでは遅いというのが、率直な思いです。

子ども達が不登校に陥らないよう、未然防止に取り組むことが何よりも大切であり、その為には、まずは、学校において先生達が、子ども達の変化を見逃さないことが重要です。子ども達が、勉強のことや友達とのことで悩んだり、心配事を抱えている。何かで不安を感じている。そうした子ども達の心の揺れに、どれだけ周りの大人達が気付いてあげられるかが重要だと思います。その意味では、日々子ども達と接している教師の役割は非常に大きいといわなければなりません。

先生の皆さんには、子ども達の発する言葉を聞き逃さない、子ども達の発するシグナルを見落とさない、そんな耳と目と心を養って欲しいと思っています。

(塾頭 吉田 洋一)